
理樹と幼馴染とリトルバスターズ

境

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理樹と幼馴染とリトルバスターズ

【Nコード】

N9543Y

【作者名】

境

【あらすじ】

これは理樹とその幼馴染である高宮勝人^{たかみやかずと}を主人公とした物語です。時期は6月ごろという設定で、原作とかみ合わないところがあるかもしれませんがそれでもいいという方は良かったら見て行ってください

ブローグ

『ねえねえ。それはなんなの?』

『これか?これは俺とお前の友情の証だよ』

『友情の証?』

『ああ。これで俺とお前は親友だ』

『親友?』

『うん。つまりもしお前が辛かったり大変だったりしたら俺がお前を助けに行ってやるってことだよ』

『ホント!』

『ああ。嘘なんてつくもんか!』

『それじゃあ勝人が辛かったり大変な時は僕が助けに行くよ』

『約束だぞ?理樹』

『うん!』

??? side

「ここか」

今日から俺が通う学校。生徒は皆既に教室に行っているようで辺りには人が全くいない

「ハア。面倒だな。サボるか・・・」

そう考えていたら声をかけられた

「君が高宮君ですか？」

どうやらこの学校の教師のようだ

「ええ・・・まあ」

「そうですか。もうすぐHRが始まるので急いでください」

そう言つと教師は校舎に向かって歩いて行つた。俺は渋々それについて行つた

第一話 幼馴染との再会

理樹 side

「あれ誰だろう?。」

僕は今教室の窓から校門の方を見ている。そこには一人の見知らぬ人・・・ここからだとよくわからないが恐らく男・・・がいた。うちの学校の制服を着ているようだ

「自宅通いの子かな?。」

うちの学校には寮があるが自宅から通っている人もいる。でもそういう人は大体早めに来るのでこんな時間にまだ校門にいるのは少し妙だった。しばらく見ていたら先生がやってきてその人を連れて後者へと入って行った

「理樹。何見てるんだ?。」

すると不意に声をかけられた。僕はそっちの方向を向く

「おはよう。鈴」

棗鈴。僕の幼馴染で大切な恋人だ

「どうしたんだ?ボーっとして」

宮沢謙吾。彼も僕の幼馴染だ

「ちょっと校門の方を見てたんだ」

「なんだ？なんか面白いもんでもあったのか？」

同じく僕の幼馴染の井ノ原真人。ここにはいないけどもう一人幼馴染がいる。僕らは昔その五人でリトルバスターズというチームを作ったんだけど、最近メンバーが増えて今では十人になっている

「うん。なんか校門に制服を着た見慣れない人がいたんだ。自宅通いの子にしては来るのが遅いし」

「そういえば今日転校生が来るんだってー」

「あつ、小毬さん」

神北小毬さん。リトルバスターズのメンバーの一人だ

「ほう。なら理樹が見たのがその転校生かもしれないな」

「うん。そうだね」

「お前ら席につけー」

どうやら先生が来たようだ。皆席に戻っていく

「えー、今日は転校生を紹介する」

小毬さんの言ってた通りだ。教室の中で「どんな子だろう」「男の子かな」などといった声上がる

「それじゃあ入ってこい」

ガラガラっとドアを開けて転校生が入ってくる。どんな人かと思いいその人の顔を見してみる

「え？」

その顔を見て僕は呆然とした。だって知っている顔なのだ

『これで俺とおまえは親友だ』

遠い日の記憶がよみがえる

「勝人？」

勝人 side

担任が転校生について行った直後、教室から様々な声が聞こえてきた。転校生と聞いて好奇心がわいてきたのだろう。入ってこいという声が聞こえたので俺はドアを開けて教室に入った。教室に入ると生徒の声がより一層大きくなった

（鬱陶しいな）

こういう奇異の目で見られるのは好きじゃなかった。正直気分が悪い。騒がしい喧噪のなかでそれらとは全く違った声が聞こえてくる

「勝人？」

呼ばれて俺はそいつの方を見る。そこには気弱そうな、でもどこか見覚えのある顔があった。でも誰なのか思い出せない

「何だ？知ってるのか理樹？」

大柄な男がそいつに声をかける。ん？理樹？その名を聞いて俺はようやく思い出した

「お前、直枝・・・理樹か？」

「そつだよ！やっぱり勝人だったんだ！」

そう言つて理樹は嬉しそうな顔をする。俺はというとその状況についていけず頭が混乱していた。当然だ。まさかこんな所で幼馴染に再開するなんて思っても見なかったのだ

「なんだ直枝と知り合いか？」

教師の言葉で俺はようやく現実に取り戻された

「あつ、はい。幼馴染です」

幼馴染と聞いて教室中から驚きの声上がる

「お前ら静かにしろ。高宮、自己紹介をしろ」

「はい。高宮勝人です。さっきも言った通りそこにいる直枝理樹とは幼馴染です。これからよろしく願います」

「席は直枝の後ろの席がちょうど空いてるからそこに座りなさい」

「はい」

言われて俺は自分の席へと歩いていく。席に着くと理樹が声をかけた

「びつくりしたよ。まさか転校生が勝人だったなんて」

「俺もお前がここにいることにびつくりしてるよ」

「ほら、お前らHRを始めるから静かにしろ」

「あつ、すみません。それじゃ、HRが終わったら残つといて、紹介したい人がいっぱいいるんだ」

「ああ。わかったよ」

そう答えると理樹は前を向き、教師はHRを始めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9543y/>

理樹と幼馴染とリトルバスターズ

2011年11月29日12時52分発行